

サマセット・モームの世界

脇 田 勇

I 序

II 作品に現われた人間観

III 結 び

I 序

まず「要約すると」からの引用をあげよう。

「私はシニカルだと云われてきた。人間をあるがままより悪くいうと非難されてきた。自分ではこんなことをしたとは思わない。ただ、ほかの作家が眼をとじている特質を、あきらかにしただけのことである。人間の持っているもので、主としてわたしを驚かせるのは、彼らが支離滅裂だということだと思う。わたしは一つにまとまった人間を見たことがない。実にちぐはぐな性質が、同じ一人の 人の中に存在し、それにもかかわらず、ちゃんと調和を生んでいることは、わたしには驚異である。見たところ、矛盾した性格が、どうしたら同一人に存在できるのだろう、とわたしは自らに問うたものだった。⁽¹⁾」

「世間なみの標準からすれば、容赦なく非難されるだろうところの人のなかにも、そうした善良さが、いかに多くかくれているかを示すことは、じつにしばしば、わたしを満足させた。わたしはそれを見たが故に書いてきたのである。それは罪の暗黒に包まれているので、彼らの場合時として一そう輝きをますように、わたしには思われた。善人が善良なのは当然のことだと思うので、欠点や悪徳を彼らのなかに発

(1) *The Summing Up*, Chap. 17.

見する時、わたしは興味をひかれるのである。悪人の善良さを見る時、わたしは感動するし、彼らの悪徳に対しては、寛容に肩をすくめるだけで満足するのである。⁽²⁾」

セント・トマス病院の医学生時代、解剖実習の時、ある神経が教科書通りの位置に無いことに疑問を持った。解剖助手は、解剖では例外が普通なのだと言いながら答えたのである。そしてそのことは、人間についても、解剖と同様に、真理なのだという考えを持ちに至るのである。

「正常というのは、稀にしか見出されないものである。正常とは理想である。それは人間の性格の平均から、人がつくり出した絵そらごとであって、そうした性格のすべてを一人の人間に見出すことは期待できるものではない、利己主義と親切、理想主義と好色、虚栄、内気、無欲、勇気、怠惰、臆病、頑固、猜疑など、それらが一人の人間の中に共存していて、もっともらしい調和をなしているのである。⁽³⁾」

「要約すると」は1938年、モーム64才の時の作であるが、この中で「わたしにはっきり言えることがただ一つだけあることを認めるであろう。そして、それは、誰にでもはっきり言えることは、なかなかないものだということである。」と語っている。彼は人生の意義や目的を必死に探究してきた。ハイデルベルヒ時代、クノ・フィッシャーの講義をきいて以来、おびただしい哲学書を渉りようした。カントに昂奮させられたり、プラグマティストにひどく心をひかれたりなどした。自分の哲学体系を樹立しようとまで最後に考えるが、それも果さずに終っている。宗教的な影響もうけ、倫理学を読み、さまざまの神を探究してもみたが、ついに神の存在も、靈魂の不滅も信ずるに至らなかった。75才のモームが、1894年の時代の如く、その心境が少しも変わっていないことは「作家の手帖」の終りに明白にでている。不可知

(2) *ibid.*, Chap. 17.

(3) *ibid.*, Chap. 20.

論者、決定論者に終始しているといえる。

作家モームが関心を持ったのは普通の人間で、その測りがたさ、その特異さは尽きぬ作品の素材を供給し、その撞着した要素の塊のような人間は涸れることのない泉であったのである。彼はヒューモアのセンスでその矛盾を楽しんだ。彼のシニシズムに肉づけするものはこのヒューモアのセンスだと言えよう。この寛容さから、人を裁くことをせず、観察しているだけで満足している。

「法廷で裁判官が見たところ熱心に道徳を説くのを聞いた時、その言葉が示すほど完全に、人間性を忘れることが、彼らにできるものだろうかとわたしは考えたものであった。オールド・ベイリーのその裁判官の花束のかたわらに、一束のトイレット・ペーパーを置いておけばよいと思う。そしたら、自分も他の人々と同様、人間であることを憶い出すであろうから。」⁽⁴⁾

Ⅱ 作品に現われた人間観

人間性の矛盾の共存という考え方は、モームの多くの作品にあらわれてくる特徴であるが、ここにいくつかの例証を試みてみよう。

‘Mr. Know-All’（物識り先生）に出て来るマックス・ケラーダはモームが日本へ行く船で知り合いとなり、たちまち嫌悪をいだかされた船客である。ケラーダは、外の誰よりも何でも知っていると主張するおしゃべりの議論ずきの男である。甲板上のスポーツ全般を支配したり、舞踏会の企画をしたり、万事を管理しようとする出しゃばり男である。このケラーダは、日本に帰任の米国領事とその妻の真珠のくさりの価値について議論をはじめ。ケラーダは、真珠に関して、自分の知らないことは知るに値しないとうそぶき、そのくさはり1万5千ドルのねうちありと宣言する。領事は、その真珠

(4) ibid., Chap. 16.

は模造品で、妻が18ドルで買ったのだと答える。ケラーダは真贋について100ドルを賭けて真なりと主張していたので、拡大鏡を取り出し調べる。勝ち誇ったように笑って、口を開こうとした時、領事の妻の蒼白の額と、おびえきった眼の表情に気がつく。ケラーダはこの時、事の真相をいち早く察知し、領事に敗北の100ドル紙幣を渡すのだが、その時領事は「もう二度とそんなに自信を強くするな。」と忠告する。しばらくたって、モームはケラーダに真珠は文字通り模造品であったのかと頼ねるのだが、彼は「私も美しくかわいい妻がいたら、私が神戸に滞在している間、1年間もニューヨークで過ごさせるようなことはしないだろう。」と答える。ケラーダへの嫌悪の情がとたんに賞讃の気持に変わるのである。

‘Mackintosh’ という短篇では、南洋の島の司政官ウォーカーが、その助手マッキントッシュの立場から語られる。ウォーカーについては、好意的な印象を与えられない。この作品でも、モームは、ウォーカーの外貌の詳細な記述を試みる。彼はすごく太ってグロテスクであり、粗野で官能的で、大酒のみで、食事のとり方も下品で不潔きわまりない。土人の取扱いは専制的で、時には父の慈悲深い愛情らしいものを示すように思われても、それはマッキントッシュに軽蔑の気持を助長させるだけである。ウォーカーは、利己的な人間が、その犬を愛すると同じように、土人が自分の権力内にいる限り土人を愛するに過ぎないからである。

しかしその人間像がくずれる事件が勃発する。土人の労務者の一人に射たれたウォーカーは、瀕死の姿で事務所に運ばれる。殺人を耳にした土人たちは事務所に集まってきて、ウォーカーの枕辺で泣きふせるという予期しなかったことが起る。土人たちが、その太っちょの暴君を愛していることは明らかなのである。ウォーカーは自分を殺そうとしたものが誰であるか知っているが、事故で死んだと言いふらすよう助手に命じる。それは、もしイギリス官憲が殺人を耳にしたら、艦隊をくり出し村を砲撃し、無垢の島民を殺すことを知っているからである。さらにマッキントッシュの驚いたことに、ウォーカーは聖書にふれる。

「きみは信心ぶかい男だからな。マック。奴らを許してやるのは何と
 言ったけね。知ってるだろう。」しばらくの間 マッキントッシュは答
 えなかった。彼の唇はわなないた。「父よ、彼らを許したまえ、その
 為す所を知らざればなり——ですか。」「そう、そいつだ、奴らを許し
 てやってくれ。わしはな、奴らを愛してきた、いつでも愛してきた。」
 彼はためいきをついた。唇がかすかに動く、マッキントッシュはその
 言っている言葉を聞くために、耳をすぐそばまで近づけねばならなかつた。
 (5)

マッキントッシュの考えていた卑劣な男がキリスト教精神で死んで行く。ピストルを手にしたマッキントッシュは、環礁の中に踏みこんで行き、
 鱧の餌となって果てるという結末になっている。

‘Rain’ はあまりにも有名な短篇の傑作であるが、ここでも人間性の秘密を知らされる。サモア島のパゴパゴの港に着いた、宣教師デイヴィドソン夫妻とマクフェイル夫妻、それにサデイ・トムソンという白人女が、沛然とふる雨にふりこめられ、一軒の旅館に同宿することになる。トムソンという女は、ホノルルで食いつめた売笑婦らしいとわかり、宣教師は夜も眠らずにその女性に道をとく。結局宣教師の真心が天に通じたのか、女は悔い改めの一步手前まできた。医師のマクフェイルはいい加減でやめればよいのにといいながらトロトロと眠ってしまう。翌朝医師は、起される。そこにはデイヴィドソンの死体があった。のどが耳まで切られて、右手には切るのに用いられた剃刀が握られていた。宣教師は罪を悔い改めさせることには成功するが、それまでに彼女の存在がきわめて強力に影響を及ぼして、彼女を犯すことによって自殺する。物語りの核心は、売春婦が宗教的な感情を持つことができ、宣教師が姦淫の罪を犯すことがあるということである。トムソンの口にする最後の一句「おもえ男たちなんて、みんなうす汚ないけがらわしい豚だ。みんな同じだ。一人のこらず豚だ。豚だ。」は、この名篇の結びとして

力強い効果をあげている。

The Razor's Edge のスザンヌ・ルーヴィエは、自分の肉体の価値と、自分自身の利益ならびに愛人の利益のためへの使い方を知っている。彼女は芸術的な生活を愛しているし、自分も多少芸術の心得を持っている。決して美貌ではないが、モデルとして画家や彫刻家に対して感動を与えるように思われる。才能はあるようだが、モデルを雇うだけの余裕のないような男が好きである。愛する男たちが成功して、彼女のもとを去っていくという事実は、彼女を落胆させたりしない。スザンヌは人を激励し、鼓舞するモデルであるばかりでなく、賢明で質素な主婦でもある。だから、彼女の価値は愛する男にとって高められるのは当然である。彼女は自分の肉体を売って生きているが、しかし何をさしおいても、人生における唯一の重要な価値だとモームの考えるもの、すなわち善良さをもった人間である。

「善良さほど美しいものは、ほかにない。そして一般の標準からすれば、無慈悲にも非難されるような人々のうちに、どれだけ善良さがあるかということを示すのは、しばしば私を喜ばせてくれた。私は善良さをみただけで示したのである。善良さは、罪の暗さに囲まれているからこそ、いっそう彼らの中で、きらきらと輝いていると思われることが、ときどきあったのである。」⁽⁶⁾

S. A. Jensen は、モームと Dickens との人間描写の比較を試みている。⁽⁷⁾ Dickens は、人物を白か黒かに色分けし、天使はいつでも天使らしく、悪漢は徹頭徹尾悪漢らしく描いているのが批判の一つの陳腐な概括である。モームについては、人物はスペクトルの全色で描かれている。Dickens の人物は、静止した型であって、モームによれば、そんな型は全くないのである。人間は同質どころか「矛盾した要素の束」(a bundle of contradictory

(6) *The Summing Up*, Chap. 17.

(7) Sven Arnold Jensen: *William Somerset Maugham*, p. 68.

elements) なのであると語っている。

Cakes and Ale にも、人間性のケイオスの例を見出すことができる。世渡りの術にたけたオルロイ・キアは「ヴィクトリア時代の最後の人」である小説家エドワード・ドリフィールドの伝記を未亡人から依頼される。ドリフィールドを熟知しているモームに情報の提供を求めてくる。モームはドリフィールドがある通俗的な演芸場の歌を歌うのが好きであったことを教える。キアは失望する。「私にはドリフィールドが演芸場の歌を歌っていたなんてことは、理解することができない。結局ある人物の肖像画を描くときは、濃淡の割り合いを正しくしなければならない。まったく調子はずれのものを材料にしたら、印象が混乱させられるだけだ。⁽⁸⁾」

「印象を混乳させる」(to “confuse the impression”) ことは、モームがたびたび用いた手法である。モームは、人間の本性がいかに混乱しているか、人間の行動がいかに多種多様で複雑なものであるか、人間の動機がいかに混合しているかを知っているからに外ならない。

人生と人間についての矛盾の肯定が、人生模様の哲学に統一されて行くことは、多くの作品から帰納されてくる。

青年時代の自分をモームは回顧する。

「自分の人生の模様をつくりたかったのだ。その中で、書くことも本質的な要素ではあるが、人間本来のあらゆる他の活動もふくみ、最後には、完全な終りとして、死が仕上げるような模様である。⁽⁹⁾」

「わたしとしては、それらについてできるだけ、善処するよりほかなかった。そこで、自分でつくった模様を執拗に織りつづけてきた。それが完全な模様だとは、私も主張しない。しかし、環境と自然から与えられる、非常に制限された力で望みうる最高なものだったとは思っ

(8) *Cakes and Ale*, p. 135.

(9) *The Summing Up*, Chap. 15.

ている。⁽¹⁰⁾」

Of Human Bondage のフィリップは多くの苦悩を経験した。また我々は、モームが苦悩は人間を高貴にするものであると見なすのを喜ばないことも知らされている。人それぞれの人生が一つの模様で、その模様を構成するさまざまな糸が、人それぞれの思想であり、感情であり、行為である。我々は一人の人間の行為を観察することはできるであろうが、しかし人間の動機、思想、感情、さらにその人間のパーソナリティを構成しているその他の要素について少ししか知ることができないか、あるいは全然知ることができないかのいずれかである。モームが示しているように、売春婦が、まじめな芸術愛によって動機を与えられることもあり得るし、深い宗教的動機によって心を動かされさえすることもあり得るのである。‘Mackintosh’ のウォーカーのような残忍な暴君が、人民に対する心からの愛情や、人民を保護しようとする誠実な願望に従って行動することも起ってくる。

人間性の矛盾の肯定は寛容の精神に昇華して行く。モームは自身の重大な欠点ゆえにこそ、他の人間に対する寛大な気持を持つようになって行く。

「僕という人間は、強いて 道徳的義憤を 装うことに、妙に気がひける。そもそも道徳的義憤という奴が、決して一種の自己満足感を伴うものであり、かりにもヒューモアを解するほどの人間は、それだけでもテレ臭くなる。⁽¹¹⁾」

この寛容の源泉はヒューモアの感覚であることが判然としてくる。ヒューモアの感じは、彼自身の弱さを感じさせる以外にも、きわめて多くの腹だたしさから彼をかくまってきたのである。*The Narrow Corner* のソーンダーズ博士は彼の最も楽しく創作した人物の一人であり、明らかに自叙伝的な人

(10) *ibid.*, Chap. 15.

(11) *The Moon and Sixpence*, Chap. XXXII.

物である。彼は戸籍を失って中国に住んでおり、道徳的に罪のない人間ではないという印象を与えられる。しかし、彼は寛容の人であり、一人一人を非常に尊敬する人である。ニコルズ船長はごろつきである。博士はこのやくざ者が好きである。ニコルズ船長は人にいたずらをして、しかも後になってその人に何ら悪感情をいだかせないという異常な特徴を持っている。損を与えられた側の人自分が自分に悪意を持ち続けるというようなことは、理解できなかったのである。

しかし、モームの人間に対する態度にはその年齢に応じて、かなりの変化があることが認められる。「作家の手帖」によって時代を追ってみると、二十代のモームは、かなりきびしい不寛容の考え方を持っていたことを知られるが、「人間の絆」のフィリップの寛容さと「片隅の人生」のソーンダーズ博士のそれとの間には、かなりの距離のあることも知られる。フィリップの寛容には、まだヒューモアの肉づけがされていない。

Cakes and Ale では、まだ寛容さはあらわれていない。ハーデイがモデルと言われるドリフィールドは批評家に高く評価されているが、モームには、彼の価値は「彼の長寿」でしかない。風刺的になるオルロイ・キアについては、我々を楽しませるより、軽蔑の気持でいっばいにする。同じ俗物を扱っても、*The Razor's Edge* のエリオット・テンブルトンになると紳士きどりの俗臭ふんぶんたる人間として描いてはいるが、そこには寛容の気持のあることは肯定できない。テンブルトンの姪の夫が1929年のパニックで破産した時、パリにある自分のアパートを彼らにもたせ、かなりの暮しのできる金銭や召使を与えている。最高の俗物であるが、神々しいほどこっけいな人間でもある。死期の迫ったテンブルトンは、社交界への夢を忘れることができず「こんなことが今おこるとは何たることか。特にすばらしい季節だというのに」となげく。リヴィエラで夏を過していた有力な人物たちの名簿をすらすらと読みあげる。すばらしく評判の高い仮装舞踏会に自分が招待されていないことがわかり、ショックを与えられる。已に社会的には自分が葬られていることに気づかない。モームは彼の姿に憐みを禁じえず、招待状の入

手を取計らってやる。自分の死期をさとったテンブルトンは、最後の聖餐をうけるため神父を呼びにやる。神父の到着を無上の光栄と感じる。「非常な光栄ですよ、ねえあなた。わしも枢機官殿の紹介状で天国にはいれるでしょう。どんな扉も、わしには開け放たれると思っていますよ」とモームに語る。テンブルトンの人生の最後の行為は招待状に返事を書くことである。「エリオット・テンブルトン氏は、み恵み深き天主との先約のため、残念ながらノヴェマリ公妃のご懇篤なるご招待をお受け致しかね候」とモームに代筆させる。ここにテンブルトン氏の人生模様は完成したのである。モームはこの最後を見守っているうちに、頬に幾滴かの涙が流れおちたように感じる。

The Painted Veil の中で、人生を一つの芸術品とする考えが、ウォディックトンがキティ・フェインに人生の意味を語る所に出てくる。

「我々が生きているこの世界を、うんざりせずに大事にできるのは、一にかかって、人々がときどき混沌のなかから創り出す美のためだと私は考えている。人々が描く絵、作曲する音楽、書く書物、送る人生、これらはみんな美しいが、なかでも最も美しいものは、美しい人生である。それは完全な芸術作品である。」⁽¹²⁾

キティ自身も変貌する。彼女も自分自身の人生模様を織りはじめる。*The Razor's Edge* のラリーも、多くの思想遍歴の後、ある意味の悟道に入り、自分の将来の人生を意匠と一致させて形づくろうと決心する。

Of Human Bondage の主人公フィリップは、パリーで出逢った詩人クロンショウから、絢爛たる花模様のペルシャじゅうたんの話をきかされ、「君はいろいろ思いまどっているが、あのじゅうたんを見ればよい、人生の意味はあれでわかるよ」と謎の言葉をきかされる。その後フィリップは色々の経験に遭遇し、思い悩んで行くうちに、クロンショウの言葉が、漠然と人生

(12) *The Painted Veil*, p. 233.

の象徴として脳裡に浮ぶのである。ミルドレッドの恋に破れた時、クロンショウの贈物だという一枚のペルシャじゅうたんを手にする。時々あらわれるペルシャじゅうたんの謎が、忽然として解かれる場面が106章にでてくる。

「クロンショウのことを考えながら、フィリップはふと彼がくれたペルシャじゅうたんのことを思い出した。人生の意味とは何か、と訊いたフィリップの質問に対して、彼はこれが答だと言った。フィリップは突然、その解答に思い当った。彼はクスリと一つ笑った。わかってみると、それは、まるであの謎遊びのあるものに似ていた。さんざん苦しんだあげく、さて解答を教えられてみると、なぜこれしきのことがわからなかったのか、われながらわからないちょうどあれだった。答はあまりにも明白だった。人生に意味などあるものか。空間を驀進している一つの太陽の衛星としての地球上に、これも遊星の歴史の一部である一定条件の結果として、たまたま生物なるものが生れ出た。したがって、そうしてはじまった生命は、いつまた別の条件で、終りを告げてしまうかも知れない。人間もまた、その意義において、他の一切の生物と少しも変りない以上、それは、創造の頂点として生れたものなどというのでは、もちろんなく、単に環境に対する一つの物理的⁽¹³⁾反応として、生じたものにすぎない。」

「ちょうど織匠が、あの精巧な模様を織り出して行く時の目的が、ただその審美感を満足させようというだけにあるとすれば、人間もまた一生を、それと同じように生きていいわけだし、また彼の行動一切が、なにか全く彼自身の選択以外のものであるとしか考えられないとすれば、やはり同じように、その人生をもって、単に一片の絵模様意匠と観ずることもできるはずだ。なにもある行為を、そうしなければならぬ必要もないかわりに、したからといって、別に益もない。た

(13) *Of Human Bondage*, Chap. 106.

だ彼自身の喜びのために、なにかをしたというにすぎない。人間一生のさまざまな事件、彼の行為、彼の感情、彼の思想、そうしたものから、あるいは整然とした意匠、あるいは精巧、複雑な意匠、あるいは美しい意匠を、それぞれ織り出すことができる ハラだけだ……さてこの人生という広大な経糸を考えると、人はその個人的満足にしたがって、模様を織り出すべき、どんな好みの撚糸を選び出してもよいわけだ。ただその中に最も明白で、最も完全で、最も美しい模様が一つだけある。すなわち、人が生れ、成長し、結婚し、子供をつくり、⁽¹⁴⁾パンのために働いて、そして死ぬという模様がそれだ……」

何かの理想とか欲望とかに縛られてとりこになっている状態、それが人間が束縛されている姿といえよう。人間の幸福とは、その束縛から脱出した時、はじめて生れてくるものである。これがフィリップの到達した結論であり、モームの人生観でもある。フィリップはペルシャじゅうたんから、苦痛と不幸を平静な心で受け入れることを学び、苦痛や不幸は錯綜した模様に必要なくべからざる重要な部分として眺め、さらに模様の美を増加するものとしてさえ眺めることを学ぶ。

モームの人間観形成の要因として、ロンドンの聖トマス病院付属医学校の生活を見のがすことはできない。はじめ単調であった医学校の生活も外来患者の診療見習いに出るようになると俄然興味が湧いてきた。免状をもらうためには一定数の出産に立ちあうことが必要であり、そのためにはランベス地区のスラム街の、警官でさえ入って行くことを躊躇するような所に入らせねばならなかったが、作家を志さず青年モームには尽きぬ興味の泉であった。その体験が、後日 *Liza of Lambeth* という処女作として結実することになる。臨床の段階になって彼がぶつかったのはなまの人生であった。人の死ぬ姿も見た。苦痛にたえる姿も見た。人間の希望が、恐怖が、安堵が、どう

(14) *ibid.*, Chap. 106.

いう様相を呈するかも知目のあたりにすることができた。幻影としか思えないものに万幅の信頼を託して信仰に目をかがやかす人もいたし、死の前兆に接しながら、内心の恐怖を周囲の人たちに見せたくないばかりに、皮肉めいた冗談でそれをまぎらわせる人もいた。苦しみは人間を高貴になどしないで、むしろ利己的になり下劣になりケチ臭くなり、疑いっぽくするということは、しばしば出てくるモームの考えだが、この体験から生れてきている。もう一つの収穫は、ここではじめて接した唯物的な発想法も、当時の科学思想を実証するものとして、彼を狂喜させた。人間の頭脳の働きなども、さして崇高なものでなく、星とか原子のような、自然現象を支配するのと同じ因果律に支配されているに過ぎない。こうした医学生の修業の間に、後年、モーム文学の基調をなす人間に対する興味、執拗なまでの好奇心が醸成されて行った。

次にフランスのモラリストたちの影響が考えられる。人間性の複雑さは、モーム文学の主題であるが、それはまたモラリストたちの出発点でもあった。モンテーニュ、パスカル、ラ・ロシュフコ、ラ・ブリュイエールなどのモラリストは彼の人間観察に影響を与えたと言える。

モームの興味の対象は、名もなき普通人であって、その人間たちのあらゆる性癖や奇行が作家の興味をかきたてている。しかれば、普通人のいかなる面に興味を感じたのであろうか。それは一貫性の欠如である。何よりも魅力を感じるのは、一見普通と思われる人間の常規を逸した行為である。職を求めてたよってきた男を危険な遠泳にやって死なせ、計画的にやったのかと聞かれて、ちょうどその時仕事の口がなかったからと平然と答える話は、*'A Friend in Need'* という短篇であるが、正常人の意外性を取上げる。

「我々は偉人が弱くけちで、不誠実又は利己的で、性的に墮落しており、虚栄的で節度がないことを発見するとたまげる。そして多くの人々は、人々が英雄視している人の缺陷を暴露するのは恥ずかしいことと考える。人間は大体にたりよったりである。人間は皆偉さと浅まし

さ、美德と悪、高貴と卑劣のごったまぜである。⁽¹⁵⁾」

モームは一般世間で、いかがわしいと看做されているような人間、換言すれば、悪党の美術に興味を持ったのである。彼の作「十大小説とその作者」の中で、バルザックについて「全ての小説家と同様、彼は善人よりも悪人の方をうまく書いた」と言っているが、彼の場合についても同様のことが言える。*The Narrow Corner* に登場する二人の悪党、ソーンダース博士とニコルズ船長の魅力はここに求めらるべきであろう。*The Moon and Sixpence* のストリックランドはどうであろう。イギリス小市民の彼は、40才を過ぎて、突然衝動的に妻子を捨て、パリに出て絵を書きはじめた。自分の画才の有無は問題ではない。病気の看護をしてくれた友人の愛妻を自分のものとし、その裸体を描いてしまうと、もはや興味なしと捨ててしまう。彼女を自殺に追いやって悔いるところがない。どん底の生活からタヒチに渡り、病苦と窮乏の中に画き続けて生涯を終る。この主人公の人生模様こそ、作家モームの最も魅力を感じるところで、彼の考えによれば、その生涯は自分の絵模様をかき上げたという意味で大成功であり、その絵模様は完璧ということになる。ここには、青年時代に受けた「芸術のための芸術」の世紀末の思潮もうかがえる。作者がストリックランドにひかれたのは、こうした人間の悪及びその中からのすばらしい美の創造といったような面だけでなく、その全体としての生き方、つまりその描く人生模様のみごとさであることは言うまでもない。

モーム小説の面白さの一つは、その逆説からくる意外性という点である。人間の心に潜む矛盾が、逆説を生み、それが有効に作用する。‘A Man with a Conscience’ では、友人の許婚者に愛情を感じている男が、自分の一言できまる友人の就職について不利な発言したことにより、友人はその職を失ない、遠い東洋に職を求めて去って行く。結果、その女性は自分の妻となる。東洋に行った友人は、断腸の思いで放埒な生活に明け暮れするうちに

(15) *The Summing Up*, Chap. 16.

病を得て、異国に果てる。そのあとで良心がうずき出して、友への悔痕が心をさいなみ、その結果妻殺しをする男の物語りである。「ある良心」というタイトルによって、作者が意図したのは、人間心理の不可解なひだみみたいなものであると言える。

Cosmopolitans の中の *The Ant and the Grasshopper* では、勤勉な者が、将来成功して行くという既定の観念を打破り、のらくらと暮して行っでは借金し、その借金を踏み倒して、今に警察の厄介になるだろうと、まわりの者からいみ嫌われていた男が、あくまで自分の快樂追究の生活を続けて行くうちに、金持の未亡人と結婚して裕福な晩年を送ることになり、まじめに暮して、放蕩の弟に迷惑を蒙っていた兄が、地だんだ踏んでくやしがる物語りである。

‘*Footprints in the Jungle*’ では、主人公が、世話になった友人の妻と懇ろになって、ついにその女を妊娠させ、不能者の夫に感づかれることを恐れて、その夫を殺害し、そのあと生れてた娘を不義の夫婦が育てあげ、平和な暮らしを立てて行く様が淡々として語られて行く。

人殺しをしながら、刑罰を免がれて平然と暮して人間を扱った作品は珍しくない。‘*A Happy Couple*’ はその一例である。ウイングフォードという老嬢に仕えるメイドが、この老嬢の侍医と相通じ、計画的に毒薬を長期間使って殺害する。絞首刑に値する残忍な行為であったが、裁判において、医学的診断の結果、メイドが処女であったことがわかり、無罪となる。この物語を作者にする人物は、実はかつての裁判官で「あの女は自分の愛する男を手に入れるために殺人の罪を平気で犯しながら、彼と不法な情交いとなむことを好まなかったのだ」と語る所で、この物語は終わっている。

‘*Virtue*’ という短篇では、女がなまじ美德を重んじたために、その美德があだとなり、その夫を自殺にまで追いやる物語りである。作者がマレーで知り合った若者モートンが賜暇休暇をとり本国に帰ってきた時に、モートンの旅情を慰めるため、引き合わせたビショップ夫妻が、モートンと仲よくなったのはいいが、この夫人と恋仲となる。しかし貞節な夫人は最後の一線

は踏みはずさなかった。夫人の不貞を疑った夫は、洋酒をあおるようになる。四十四才ではじめて恋愛の味を知った夫人は夫を捨てる。しかし一時的に燃えたモートンの激情は任地に着くとさめ果てる。妻が家出したあと、夫は睡眠薬を多量に飲んで死ぬ。夫を死に追いこんだものは、妻があまりにも清潔な貞操観念を持ちすぎていたためだったというのである。作者のこの事件に関する意見は次のようなことであろう。すなわち、真実を直視し、常識を働かせることが犬儒主義であるというならば、確かに自分は皮肉屋であり、いやな人間と思ってもらいたい。このマージャリーは四十四才の中年の女で、結婚して16年になる。自分に大さわぎをしてくれる若者に夢中になるのは当然である。しかしそれは恋などというものではない。それは生理的なすわざである。若者の言ったことを真にうけるのは愚かな話だ。若者の言葉は、若者自身ではなく、彼の飢えた性のなす業である。彼は4年間、外地にあって、白人の女性に関する限り、性の飢餓に苦しんできたのだ。彼があつた時にした約束を楯にとり、彼女が彼の生活を台なしにするということは無茶というべきだ。彼は恋と思ったかも知れないが、実はそれは色情にしかすぎない。もし彼らがベッドを共にしたとしたら、夫チャーリーは死なずに済んだのだ。彼女の貞節さが、この面倒をひきおこしたのだということが作者の言わんとするところである。

Ⅲ 結 び

モームの価値を最初に発掘し、激賞したのは、米国の作家ドライザーであつたが、爾来、モームの評価は、イギリスの批評家シリル・コンリーのよつに、彼を偉大な小説家と高く評価する人から、アメリカの批評家エドモンド・ウィルソンのよつに、彼には芸術的天分が全くないと酷評する人との間に、多くの段階と幅が存在することは事実である。芸術家としての位置づけはさておいて、長篇、短篇を問わず、読者を自作の魅力のとりこにしてしまふ筆力は誰しも否定できない。単なる大衆小説家として片づけることのできない何物かを感じとるのである。長い文章修業から生れた珠玉の文字とその

底流をなす彼の人生観、人間観から生れてくる人生模様には、共感を覚えることが、多くの読者層を持っている所以である。文学史の上に、どれだけの重さを持って残って行くかは予言できないにしても、彼の作品にもりこまれている人間観、人生観には、洋の東西を問わず、時代を超越して、読者を持てる可能性があるとは断言してまちがいなまい。すでに故人となったこの作家の評価は、今までより更に露骨に、どきつくなされて行くことは想像できるが、文学の鑑賞というものは、本質的に主観的なものであるという論者の立場からすると、それは当然なさるべきものであると言ってよい。しかし、我々は、世界中いたるところのハイブラウからロウブラウに至るこの幅広い読者層という現実を見落すことはできない。作品中に、さりげなく語られる言葉にも、青年時代以来、悩み、思索した結果到達した悟りみたいなものを発見して行けば、彼の作品を別な観点から眺めて行くことも可能である。この小論で、彼の人生模様の哲学に焦点を当てて見てきたわけであるが、例えば劣等感の文学とか、同性愛の文学とか、さまざまな分析が可能であろう。底知れぬ掘りあがりへの挑戦は今後も続くであろうし、知られざる他の面の発掘に多くの余地を残している。

Reference Books

R. A. Cordell: *Somerset Maugham*, Indiana Univ. Press 1969.

Sven A. Jensen: *William Somerset Maugham*, Oslo Univ. Press 1957.

W. Somerset Maugham: *The Summing Up*, Heinemann 1964.

: *A Writer's Notebook*, Heinemann 1952.

: *The Complete Short Stories*, Heinemann

Vol. One 1967.

Vol. Two 1967.

Vol. Three 1968.

: *The Moon and Sixpence*, Heinemann 1966.

: *Cakes and Ale*, Heinemann 1963.

: *The Narrow Corner*, Heinemann 1967.

: *The Painted Veil*, Heinemann 1967.

: *Of Human Bondage*, Heinemann 1966.